

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	明代金瓶梅資料訳注稿（その三）
Author(s)	川島, 優子
Citation	中國中世文學研究 , 73 : 106 - 115
Issue Date	2020-03-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049267
Right	
Relation	



明代金瓶梅資料訳注稿（その二）

川島優子

はじめに

前稿「明代金瓶梅資料訳注稿（その一）」（『中国中世文学研究』第七一号、二〇一八）、「明代金瓶梅資料訳注稿（その二）」（『中国中世文学研究』第七二号、二〇一九）に続き、『金瓶梅』に関する明末清初の資料について訳注を施す。本訳注は黄霖編『金瓶梅資料彙編』（中華書局、一九八七）を底本とし、巻三に収められる明、清、近代諸家の文集、筆記、書簡中における『金瓶梅』に関する雑記や雑評のうち、明末清初諸家の記述である①袁宏道「董思白」、②袁宏道「觴政」、③袁宏道「与謝在杭」、④袁中道「游居柿録」、⑤李日華「味水軒日記」、⑥沈德符「万曆野獲編」、⑦屠本峻「山林經濟籍」、⑧張岱「陶庵夢憶」、⑨尺蠖齋「東西兩晉演義序」、⑩張無咎「批評北宋三遂平妖伝叙」、⑪笑花主人「今古奇觀序」、⑫崢霄主人「魏忠賢小説斥奸書凡例」、⑬薛岡「天爵堂筆余」、⑭聽石居士「幽怪詩譚小引」、⑮夏履先「禪真逸史凡例」、⑯煙霞外史「韓湘子十二渡韓昌黎全伝叙」、⑰李漁「三國志演義序」、⑱宋起鳳「王弼洲著作」を取り上げる。「そ

の一」では①～⑥、「その二」では⑦～⑱に訳注を施した。本稿では⑬～⑱についての訳注を掲載する。字体は常用字に改め、⑬、⑱については便宜上分割した。

⑬薛岡「天爵堂筆余」（一）

往在都門、友人関西文吉士以抄本不全『金瓶梅』見示、余略覽數回、謂吉士曰、「此雖有為之作、天地間豈容有此一種穢書。当急投秦火。」後二十年、友人包岩叟以刻本全書寄敝齋、予得尽覽。初頗鄙嫉、及見荒淫之人皆不得其死、而独吳月娘以善終、頗得勸懲之法。但西門慶当受顯戮、不応使之病死。

〔語注〕

○薛岡 一五六一～一六四一？字は千仞。鄞（現在の浙江省寧波市鄞州区あたり）の人。胡文学編『甬上耆旧詩』巻二十四「薛山人岡補録」によれば、若い頃に難を逃れて長安に移り、その後都で新進士の代筆によって名が知られるようになったという。晩年は里に帰り、布衣のままその生涯を終えた。「天爵翁」と称し、八十歳の頃に、万曆庚辰（八年）から崇禎庚辰（十三年）までの六十年

間に作った詩を集めて『天爵堂（文）集』二十巻を著す（現存する明刻本は十九巻）。○天爵堂筆余 薛岡による隨筆。もともとは『天爵堂集』に附されていたとされる。

『五朝小説皇明百家小説』『說郛（続）』等に所収。○関西文吉士 三水（現在の陝西省旬邑県あたり）の文在茲、字は吉士、万曆二十九年の進士か。文在茲の甥と同じく三水の文天翔とする説もある（魏子雲『明代金瓶梅史料詮釈』貫雅文化事業有限公司、一九九二年等）。○秦火 秦の始皇帝による焚書のこと。○包岩叟 名は士瞻、字は五衢、号は岩叟。薛岡と同郷の出身。山東德州の判官を務める。上述の『甬上耆旧詩』巻二十七に「包德州士瞻」がある。

〔訳〕

かつて都にいた頃、友人である関西の文吉士が、完本ではない金瓶梅の抄本を見せてくれた。私はざっと数回読み、吉士にこう言った。「これは有為の作ではあるものの、天地の間にこのような穢書が受け入れられてよいものだろうか。早急に秦火に投じるべきである。」と。それから二十年後、友人の包岩叟が完本の刻本を我が家を送ってくれたため、全編を読むことができた。初めのうちはたいへん軽蔑し嫌悪していたが、荒淫な者たちがいずれも真つ当な死を迎えられず、吳月娘だけが天寿を全うするのを見るに及んで、勸善懲惡の法則を体得することができた。しかし西門慶はさらし首にするべきであって、病死させるべきではなかった。

⑬薛岡「天爵堂筆余」（二）

簡端序語有云、「説『金瓶梅』而生憐憫心者菩薩也、生畏懼心者君子也、生歡喜心者小人也、生效法心者禽獸耳。」序隱姓名、不知何人所作、蓋確論也。所宜焚者、不独『金瓶梅』、『四書笑』、『浪史』当与同作坑灰。李氏諸書存而不論。（明崇禎間刊本『天爵堂筆余』巻二）

〔語注〕

○簡端序語 書物のはじめに付けられた序文。現存する最古の版本である『金瓶梅詞話』には冒頭に欣欣子の序、および東吳弄珠客の序が見られ、崇禎年間までに作られたと考えられる改訂版（通称「改訂本」「崇禎本」）には東吳弄珠客の序のみが見られる。続く文章は、東吳弄珠客の序に見られるもの。○四書笑 開口世人編『李卓吾先生批点四書笑』、『四書』の中の文言を用いた笑話集。国立公文書館内閣文庫に林羅山旧蔵の抄本が見られる。

○浪史 『浪史奇観』全四十回。主人公である秀才梅彦卿の女性遍歴を描いた白話小説。○李氏諸書 李氏は李卓吾のこと。一五二七～一六〇二、名は贄、別号は温陵居士。晋江（現在の福建省泉州市あたり）の人。明末の陽明学左派の思想家。本訳注稿「その一」で取り上げた袁宏道、袁中道、馮夢龍ら、多くの文人に莫大な影響を与えた。その思想および影響力の大きさをゆえ投獄され、獄中で自死する。「李氏諸書」とは、その著書である『蔵

書』『焚書』『統藏書』『統焚書』等を指す。

【訳】

書物のはじめに序文が置かれ、『金瓶梅』を読んで憐憫の心が生じる者は菩薩であり、恐れ的心をなす者は君子であり、歓喜の心が生じる者は小人であり、模倣の心を起こす者は獣である。」という。序では姓名が隠されているので、誰が書いたのかはわからないが、確論であろう。焼き払うべきは『金瓶梅』だけでない。『四書笑』や『浪史』も一緒に灰とすべきである。李氏の各書物についてはここでは論じない。

⑭ 聴石居士「幽怪詩譚小引」

不観李温陵賞『水滸』『西遊』、湯臨川賞『金瓶梅詞話』乎。『水滸伝』、一部『陰符』也。『西遊記』、一部『黃庭』也。『金瓶梅』、一部『世説』也。然則、此集播伝於世、即謂晋魏来一部詩譚亦可。時崇禎己巳陽生日聴石居士題於緑窓。(明刊本『幽怪詩譚』巻首)

【語注】

○聴石居士 詳細不明。大塚秀高『幽怪詩譚』について、『集刊東洋学』六五、一九九二は、「纂輯者碧山臥樵、評者桐菴居士、それに「小引」を記した聴石居士についてはまったく知るところがない」としつつ、「三者が同一人である可能性もなくはない」とする。また「小引」における陶淵明以下諸大家の作品に対する議論が「どうも

明末の袁石公、すなわち袁宏道に代表される公安派や、

その後を襲った竟陵派の鍾惺・譚元春の主張、深幽孤峭を思わせる。聴石居士の名が袁石公の議論を聴くの意味であること、また言を待つまい」とし、「聴石居士と碧山臥樵は李卓吾・袁宏道・馮夢龍、そして湯頭祖につながる人物だったはずだ」とする。王汝梅『幽怪詩譚・小引』解説(『河南大学学报・社会科学版』二〇〇七年第六期)も、聴石居士を『幽怪詩譚』の編者碧山臥樵その人であるとし、莫是龍(一五三九〜一五八七)の別号ではないかとする。○幽怪詩譚 全六巻。明代の伝奇小説集。未見。『中国古代小説総目(文言巻)』(山西教育出版社、二〇〇四)の解説によれば、宋代以来の不思議な話を掲載し、詩文を挟む。上述した大塚秀高『幽怪詩譚』についてにも詳しい。○李温陵 李卓吾のこと。前述。○湯臨川 湯頭祖。一五五〇〜一六一六。字は義仍、号は若士。海若、清遠道人ともいう。明の臨川(現在の江西省撫州市臨川区あたり)の人。万曆十一年(一五八三)の進士。詞曲に通じ、「紫釵記」「還魂記」「南柯記」「邯鄲記」などの作がある。湯頭祖と『金瓶梅』の関係について、徐朔方『論金瓶梅的成書及其它』(齊魯書社、一九八八)は、「南柯記」が『金瓶梅』第百回の影響を受けていること等を指摘する。万曆二十八年に完成した「南柯記」に早くも『金瓶梅』の影響が見られることについて、王汝梅氏(上述)は、湯頭祖の表兄弟劉守有の子である劉承禧が『金瓶梅』の抄本を所蔵していたため、湯頭祖はか

なり早い段階で『金瓶梅』の抄本を読んだ可能性がある

と指摘する。一方、劉洪強「崇禎本『金瓶梅』の改定者為湯頭祖考論」(『徐州工程学院学报・社会科学版』二〇〇九年第一期)は、李卓吾が『水滸伝』『西遊記』に評を付したことを併せて考えると、湯頭祖も『金瓶梅』に評を付したのではないか、つまり「崇禎本」の編者(評者)は湯頭祖ではないか、とする。○陰符 『陰符経』、元は二種あったが、現在伝わるものは「黄帝撰」とする一種のみ。兵書。ここでは『水滸伝』を兵書にたとえる。○

○黄庭 『黄庭経』、道教の經典。『黄帝内景経』『黄庭外景経』を指す。あるいは『黄庭遁甲縁身経』『上清黄庭養神経』『太上黄帝中景経』等を含む総称としても用いられる。いずれにせよ、ここでは『西遊記』を道教の經典にたとえる。○世説 『世説新語』、六朝宋の劉義慶の撰。ここでは『金瓶梅』を様々な人物が登場する逸話集にたとえるか。

【訳】

李卓吾は『水滸伝』『西遊記』を評価し、湯頭祖は『金瓶梅詞話』を評価しているではないか。『水滸伝』は『陰符』であり、『西遊記』は『黄庭』であり、『金瓶梅』は『世説』である。だとすれば、この集(幽怪詩譚)が世に伝わるに、魏晋以来の「詩譚」だといえよう。崇禎己巳(二年)の冬至、聴石居士、緑窓に題す。

⑮ 夏履先「禪真逸史凡例」

一、此書旧本出自内府、多方重購始得。今編訂、当与『水滸伝』『三国演義』並垂不朽、『西遊』『金瓶梅』等方之劣矣。故其剗削也、取梨極精、染紙極潔、鐫刻必論高手、髣髴悉虎魚、誠海内之奇觀、国門之赤幟也。具眼当自識之、毋為鴟鳴壟断者所替。(乾隆丁未刊『批評通俗禪真逸史』巻首)

【語注】

○夏履先 本書を刊行した爽閣の主人。未詳。『古本小説集成』所収の影印本(浙江図書館蔵本衙爽閣本)では、序末に「古杭爽閣主人履先甫識」とあり、封面にも、「此南北朝秘笈、爽閣主人而得之、精梓以公海内。刀筆既工、髣髴更密、文犀夜光、世所共賞。嗣此統刻種種奇書、皆膾炙人口。儻有棍徒濫翻射利、雖遠必治、斷不假貸、具眼者当自鑑之。本衙爽閣板」と爽閣主人の識語が見られ、本書が由緒正しく質の高いものであることが主張されている。○禪真逸史 全四十回。天啓年間の刊。北朝魏の將軍(のちに高僧)林澹然らの活躍を描いた白話小説。作者は方汝浩、号は清溪道人。詳細不明。なお「禪真逸史凡例」は全八則あり、本則はその第六。○剗削 彫刻する。ここでは文字を版木に彫ることを指す。○取梨 版木として良い梨木を選ぶ。たとえば清の『岐路灯』第六十二回に「自此以後、開墾、券墓、有泥水匠。破木造棹、有木匠。冥器樓庫、有扎彩匠。孝幔、衣巾、有針工。

碑碣、莫志、有石匠。雕刻梨木、有刻字匠。酒有酒館。面有磨房。髹治棺槨、有漆匠。」とある。○警勸 「警校」に同じ。校正すること。二人が向かい合って文字の誤りを校正する様が仇同士のようであることからいう。○虎魚 字形のよく似た文字を書き誤ること。『抱朴子』内篇卷十九選覽の「故諺曰、書三写、魚成魯、虛成虎、此之謂也。」に基づく。○赤幟 赤い旗。模範や手本のこと。○鷓鴣 フクロウが鳴く。「鷓」はフクロウ、あるいはハイタカ。よからぬ者のたとえ。ここでは、よからぬ輩が声高に主張することをいうか。○壟断 利益を独り占めする。『孟子』公孫丑章句下に「有賤丈夫焉。必求壟断而登之、以左右望而罔市利。人皆以為賤。」とあるのに基づく。ここでは封面の識語に「儻有棍徒濫翻射利」とあるように、複製によって利益をむさぼろうとする輩を非難しているものと考えられる。

【訳】

一、この書は、旧本が内府より出たものであり、手を尽くし金を積んでようやく手に入れることができた。ここに編纂修訂するに、まさしく『水滸伝』『三国演義』と並んで後世に残り続けるものであり、『西遊記』『金瓶梅』等はこれに比べれば劣っている。そこで、本書を刊行するにあたっては、念入りに上質な版木を選び、精魂込めて印刷をし、彫刻するに名人を選び抜き、校勘するにあつゆる誤字を訂正した。まことに海内の奇観であり、国门の赤幟である。具眼の士はしっかりと識別し、まがい

物を売りつけて利益を得ようとする輩に惑わされることのないようにされたい。

⑬煙霞外史「韓湘子十二渡韓昌黎全伝叙」

析卓韋沐目之秘文、窮人天水陸之幻境、闡道德性命之奧旨、昭幽明神鬼之異聞。分合不相抵牾、首尾不相矛盾。有『三国志』之森嚴、『水滸伝』之奇變、無『西遊記』之諛虐、『金瓶梅』之褻淫。謂非龍門蘭台之遺文、不可及也。
〔明天啓癸亥武林刻「新鐫批評出相韓湘子」卷首〕

【語注】

○煙霞外史 『古本小説集成』所収の影印本（九如堂本）では、序末に「時 天啓癸亥季夏朔日 煙霞外史題於泰和堂」と署され、卷首第二行に「錢塘 雉衡山人 編次」、第三行に「武林 泰和仙客 評閱」とある。孫一珍氏は前言で、筆跡から判断して煙霞外史は評閱者である武林泰和堂主人と同一ではないか、とする。○韓湘子十二渡韓昌黎全伝 全三十回。天啓三年（一六一三年）の刊。『韓湘子全伝』『韓昌黎全伝』等ともいう。八仙のひとりであり、韓愈の甥とされる韓湘子を主人公とする白話小説。作者は楊爾曾。万曆頃の人で、字は聖魯、号は雉衡山人、また夷白主人。「その二」で取り上げた『東西兩晋演義』も「武林 夷白主人 重訂」「武林 泰和堂主人 參訂」とあり、同じく楊爾曾と泰和堂主人によって生み出されたものと考えられる。○卓韋沐目 本書に登場する卓韋山卓

韋洞に住む沐目真人のこと。韓湘子の分身で、窮地に陥った韓愈を導く。「卓韋」は韓湘子の「湘」字を分解したもので、「沐目」は韓湘子の「湘」字を分解したもの。○諛虐 「諛諛」に同じか。○龍門蘭台 司馬遷と班固。龍門は漢の司馬遷のこと。龍門（現在の陝西省韓城市あたり）の出身であるため。蘭台は後漢の班固のこと。蘭台令史に任ぜられたため。

【訳】

卓韋の沐目真人の不思議な書物を読み解き、天地水陸の幻の世界を究め、道德性命の奥旨を明らかにして、あの世とこの世や神鬼に関する異聞を書き記す。分合（話が分かれたり交わったりすること）には齟齬がなく、首尾にも矛盾はない。『三国志』のような莊嚴さや、『水滸伝』のような不思議さを備え、『西遊記』のような悪ふざけや、『金瓶梅』のような淫らさはない。司馬遷や班固が残した文章でなければ、及ぶべくもないだろう。

⑭李漁「三国志演義序」

嘗聞吳郡馮子猶賞称宇内四大奇書、曰『三国』『水滸』『西遊』及『金瓶梅』四種。余亦喜其賞称為近是。〔兩衡堂刊本『三国志演義』卷首〕

【語注】

○李漁 一一六二～一六八〇。蘭谿（現在の浙江省金华市あたり）の人。字は笠翁、謫風、号は随菴主人。「笠翁

十種曲」ほか多くの戯曲や、「連城壁」「十二楼」等の小説を残した。本序は『李笠翁批閱三国志』冒頭に置かれる。○馮子猶 馮夢龍、一五七四～一六四六。蘇州の人。字は猶龍、子猶、号は龍子猶、墨憨子等。⑥沈德符『万曆野獲編』（その一）、⑩笑花主人「今古奇觀序」（その二）の注も参照されたい。

【訳】

かつて吳の馮子猶が天下の四大奇書として、『三国演義』『水滸伝』『西遊記』および『金瓶梅』の四種を称えたというのを聞いたことがある。わたしと同意見であるのをうれしく思う。

⑮宋起鳳「王弼洲著作」（一）

世知『四部稿』為弇洲先生生平著作、而不知『金瓶梅』一書也。先生中年筆也。即有知之、又惑於伝聞、謂其門客所為書。門客詎能才力若是耶。弇洲痛父為敵相嵩父子所排陷、中間錦衣衛陸炳陰謀孽之、置于法。弇州憤激懣鬱、乃成此書。陸居雲間郡之西門、所謂西門慶者、指陸也。以蔡京父子比相嵩父子、諸狎昵相嵩羽翼。陸當日蕃群妾、多不儉、故書中借諸婦一一刺之。所事與人皆寄托山左、其声容举止、飲食服用、以至雜俳戲蝶之細、無一非京師人語。書雖極意通俗、而其才開合排蕩、變化神奇、于平常日用、機巧百出、晚代第一種文字也。

【語注】

○宋起鳳 生没年不詳。清初の文学者。字は来儀、号は弁山、覺庵、紫庭等。滄州（現在の河南省滄州市あたり）の人。「王弁洲著作」が収められる『稗説』（四卷）は、自己の見聞を記したものだ。○王弁洲 王世貞。一五二六～一五九〇。字は元美、号は鳳州、弁州山人。太倉（現在の江蘇省蘇州市あたり）の人。詳しくは⑦屠本峻「山林經濟籍」（その二）の注を参照されたい。○四部稿 王世貞の詩文集『弁州山人四部稿』、百七十四卷。○嚴嵩父子 嚴嵩（一四八〇～一五六七）とその子嚴世蕃（一五一三～一五六五）。王世貞は父の王忬が時の権力者嚴嵩によって処刑されたことから、その恨みを晴らすため、『金瓶梅』を作り、頁の端に毒薬を塗って息子の嚴世蕃に献上したという説がある。詳しくは⑥沈德符『万曆野獲編』（その一）、⑦屠本峻「山林經濟籍」（その二）を参照されたい。○錦衣衛陸炳 錦衣衛（天子直属の特務機関）の長官であった陸炳については、前稿⑥⑦も参照されたい。⑦の注にも挙げたように、『明史』巻二八七によれば、王世貞は刑部主事であった頃、陸炳の家に匿われていた罪人を引っ捕らえ、嚴嵩を介した解放の要請にも応じなかったという。また⑦の本文には、「嘉靖の頃、ある人が都督の陸炳に誣告され、朝廷に家財を没収された。その人は晴らしようのない冤罪を被り、これを『金瓶梅』に託したのだという」とある。○雲間郡 雲間は松江府（現在の上海市松江区）の旧称だが、陸炳が松江に住んでいたという記録は管見の及ぶかぎり見当たらない。

嘆いた。弁洲は憤懣やるかたなく、この書を作ったのである。陸炳は雲間郡の西門に住んでいたため、西門慶というのは陸のことを指している。蔡京父子を以て嚴嵩父子になぞらえ、周囲の人物を嚴嵩の取り巻きになぞらえている。陸は当時、多くの妾を抱え、実に節操がなかった。この書の中で諸婦人を借りてひとつひとつそれを諷刺したのである。事や人物についてはいずれも山東に託してあるが、登場人物の話し方や外見、食べ物や飲み物に身につけるもの、洒落や冗談の細かさに至るまで、都の言葉でないものはひとつもない。通俗的でわかりやすく書かれているが、流れに抑揚があり、変化に富み、日常生活を描きながら巧みな展開が百出し、当代きつての文章である。

⑱ 宋起鳳 「王弁洲著作」(二)

按弁洲『四部稿』有三変、当西曹至青州、機鋒括利、立意遷口、尚近刻画、迨秉郎節、則峻刻之迹尽去、惟氣格体法尚矣。晚年家居、濫受羔雁諛墓祝觴之言、二氏難進、雖耽白蘇、実白蘇弩末之技耳。是一手猶有初中晚之殊、中多倩筆、斯誠門客所為也。

【語注】

○西曹 刑部の別称。王世貞は嘉靖三〇年（一五五一年）、二十五歳の頃に刑部員外郎となる。○青州 現在の山東省青州市あたり。嘉靖三十五年（一五五六年）、三十歳の

い。姻戚關係にあった徐階（一五〇三～一五八三。嚴嵩父子を失脚させ、首補の座に就く）は松江府華亭県の人。なお『明史』巻三〇七（佞倖）の陸炳の伝には、「炳任豪惡吏為爪牙、悉知民間銖兩奸。富人小過輒收捕、没其家。積貲數百萬、當別宅十餘所、莊園遍四方、勢傾天下」とある。○蔡京父子 蔡京（一〇四七～一一二六）とその長子蔡攸（一〇七七～一一二六）。北宋の宰相。いずれも『宋史』巻四七二「姦臣」に伝がある。詳しくは⑥の注を参照されたい。○山左 山東省のこと。太行山の左側（東）に在ることからいう。○雜俳 さまざまな「俳諧」、すなわち洒落言葉や冗談のことか。○戲蝶 「戲諧」に通じ、ふざけることの意か。○開合排蕩 文章に抑揚があること。「開合」は開いたり閉じたりすること、「排蕩」は激しく揺れ動くこと。王世貞『芸苑厄言』巻四に「少陵強力宏蓄、開闔排蕩、然不無利鈍。」とあり、清の沈起鳳『諧鐸』巻五「名妓沽名」に「有開合、有緩急、有擒縱、是即名士作文秘鈔耳。」とある。

【訳】

世間の人は『四部稿』が弁洲先生の生涯の著作集であることは知っているが、『金瓶梅』もまた先生が中年の頃の著作であることは知らない。知っていたとしても、伝聞に惑わされて、その門客が作った書であるという。門客にどうしてこのような文才があるものか。弁洲は、父が嚴嵩父子に陥れられ、錦衣衛の陸炳がひそかにはかりごとをめぐらしてこれを害し、刑に処したことを悲しみ

頃に王世貞は青州の兵備副使に任ぜられる。○秉郎 鄆陽（現在の湖北省十堰市あたり）を司る。万曆二年（一五七五年）、四十九歳の頃に王世貞は右副都御史を任命され、翌年鄆陽に至る。○二氏 仏教と道教。王世貞は晩年、女道士王燾貞（嘉靖年間の翰林学士王錫爵の娘）を師と仰ぎ、仙道を求めるようになる。一五八〇年に王燾貞が昇天した後、その伝記『雲陽子大師伝』を記す。

【訳】

弁洲の『四部稿』を見ていくと三つの変化があるのがわかる。西曹の頃（嘉靖三十年頃）から青州の兵備副使の頃（嘉靖三十五年～三十九年頃）までの間は、舌鋒鋭く、主張も明確で、絵を描くように生き生きとしている。鄆陽の職に任ぜられる頃（万曆二年頃）になると、その鋭さの痕跡はことごとく消え去ってしまい、気格や形式だけになってしまった。晩年になると家にこもり、依頼された墓誌銘や祝宴の文章ばかりを書くようになり、仏教、道教への信仰が進んだ。白居易、蘇軾に傾倒していたものの、まことに腕の衰えた白蘇のような有様であった。このように一人の著作であったとしても、初中晩期の違いがあり、中には他人の手によるものも多々ある。そうした部分は確かに門客が書いたものであろう。

⑳ 宋起鳳 「王弁洲著作」(三)

若夫『金瓶梅』全出一手、始終無懈氣浪筆与牽強補湊

之迹、行所当行、止所当止、奇巧幻変、嬾妍、善悪、邪正、炎凉情態、至矣。尽矣。殆『四部稿』中再化再神文字、前乎此与後乎此誰耶。謂之一代才子、洵然。世但目為穢書、豈穢書比乎。亦楚『構杙』類歟。聞弁洲尚有『玉(嬌)麗』一書、与『金瓶梅』埒、係抄本、書之多寡亦同。王氏後人鬻於松江某氏、今某氏家存其半不全。友人為余道其一二、大略与『金瓶梅』相頡頏、惜無厚力致以公世、然亦烏知後日之不伝哉。(一九八二年江蘇人民出版社『明史資料叢刊』第二輯『釋說』卷三)

【語注】

○構杙 楚の史書の名。逸。張萱の『疑耀』卷四「構杙」に、「構杙、悪獸。楚以名史、主於懲惡。」とあるように、悪獸の名を書名にすることで戒めの意を込めたとされる。東呉弄珠客の「金瓶梅序」に「金瓶梅、穢書也。袁石公亟稱之、亦自寄其牢騷耳、非有取於金瓶梅也。然作者亦自有意、蓋為世戒、非為世勸也。如諸婦多矣、而独以潘金蓮、李瓶兒、春梅命名者、亦楚「構杙」之意也。」とあるのを踏まえたものと思われる。○玉(嬌)麗 既出の『玉嬌李』『玉嬌梨』に同じか。明代に作られたとされる小説。逸。清代の白話小説『玉嬌麗』とは別書。⑥沈徳符『万曆野獲編』(その一)には、「中郎又云、尚有名『玉嬌李』者、亦出此名土手、与前書各設報応因果。武大後世化為淫夫、上蒸下報、潘金蓮亦作河間婦、終以極刑、西門慶則駭愍男子、坐視妻妾外遇、以見輪迴不爽。中郎亦耳剽、未之見也。」とあり、やはり『金瓶梅』と同

ない。

(付記)本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)「粗悪本」を中心とした中国通俗小説の出版および受容に関する研究」(研究課題番号：16K02589)による研究成果の一部である。

一の作者による作品(続編)だと見なされていたことがわかる。また、作者については触れられていないものの、⑩張無咎「批評北宋三遂平妖伝叙」(その二)でも、「他如『玉嬌梨』、『金瓶梅』、另辟幽蹊、曲中奏雅、然一方之言、一家之政、可謂奇書、無当巨覽、其『水滸』之亜乎。」として、『金瓶梅』と並記される。

【訳】

ところがかの『金瓶梅』は全て一人の手によって書かれたものであるため、始めから終わりまで、気の抜けた様子やでたらめな文字、あるいはこじつけや後から付け足したような痕跡がなく、進むべきところは進み、止まるべきところは止まって、巧妙な変化や、美醜、善悪、邪正、榮枯盛衰のありさまが、周到に行き届いており、尽くされている。『四部稿』の中の最も自然で最も素晴らしい文章に近く、前にも後にも他の誰にも真似できるものではない。まことに彼をこそ一代の才子といふべきである。世間ではこれを穢書とみなすばかりであるが、穢書と並べることなどどうしてできようか。これもまた楚の『構杙』の類である。聞くところによれば、弁洲には他にも『玉嬌麗』なる書があるという。『金瓶梅』に匹敵し、抄本で、分量も同等だそうだ。王氏の子孫が松江の某氏に売り、今某氏の家にはその半分しか残っておらず全書ではない。友人が私にその内容を教えてくれたが、おおよそ『金瓶梅』と差はなく、誰も公刊しないのは残念である。しかし次の時代にはあるいは伝わるかもしれ